

## 『希有未曾有法経』における菩薩誕生記事の問題点

天 野 信

## はじめに

ブッダの生涯における重大事項を八つにまとめたものを八相と呼ぶ。その内容は、下天・托胎・降誕・出家・降魔・成道・転法輪・入涅槃である。<sup>①</sup>ブッダの伝記を記す仏教文献（以下仏伝と呼ぶ）は、これらの事柄を中心に述べているのであるが、その形態は、多種多様である。ブッダの生涯の出来事について、断片的に記す文献もあれば、下天から涅槃に至る生涯に言及する文献もある。そして、仏伝の原初形態を追求するとなると、当然、阿含・ニカーヤおよび律蔵に含まれる仏伝の調査が不可欠となる。<sup>②</sup>これらの文献に含まれる仏伝は、ブッダの生涯全てをカバーするものではなく、断片的に記すものである（ここでは *Jātaka* の注釈書である *Nidāna-kathā* は除く）。またこれらは、ブッダの成道以後から始まるものが多いが、それ以前のことを記すものも存在する。<sup>④</sup>その一つが、菩薩の誕生記事（本稿では下天から降誕までの出来事を「誕生記事」と呼ぶ）を保存する *Acchariyabbhutammasutta* (*MN.123*, *MN.III* pp.118-124. 以下『希有未曾有法経』と表記する)<sup>⑤</sup>である。『希有未曾有法経』は、仏伝におけるブッダ誕生場面を考察するうえで、古くから重視されてきた。本稿では、この経典に着目し、同じ形態を保存する *Mahāpadānasuttanta* (*DN.14*, *DN.II* pp.1-54.)<sup>⑦</sup>のヴィパッシン菩薩（過去仏の菩薩時代）誕生記事と比較検討し、その成立過程を明確にしたうえで、『希有未曾有法経』における菩薩誕生記事の問題点を指摘したい。その際、所属部派の異なる漢訳文献も併せて考察する。

## 1. 『希有未曾有法経』における菩薩誕生記事

『希有未曾有法経』の冒頭には、本経が菩薩誕生について述べるに至った経緯を説明する導入部分がある。以下その箇所を示す。

## 【資料1】

Atha kho sambahulānaṃ bhikkhūnaṃ pacchābhattaṃ piṇḍapāṭapaṭikkantānaṃ upaṭṭhānasālāyaṃ sannisinnānaṃ sannipatitānaṃ ayam antarākathā udapādi: —Ac-

chariyaṃ, āvuso, abbhutaṃ, āvuso, Tathāgatassa mahiddhikatā mahānubhāvataṃ, yatra hi nāma Tathāgato atite Buddhe parinibbute chinnapapañce chinnavaṭṭume pariyādinnavaṭṭe sabbadukkhavāṭivatte jānissati: Evaṃ-jaccā te Bhagavanto ahesuṃ iti pi, evaṃnāmā te Bhagavanto ahesuṃ iti pi, evaṃ-gottā te Bhagabanto ahesuṃ iti pi, evaṃ-silā … evaṃ-dhammā … evaṃ-paññā … evaṃ-vihārī … evaṃ-vimuttā te Bhagavanto ahesuṃ iti pīti. Evaṃ vutte, āyasmā Ānando te bhikkhū etad avoca;— Acchariyā c’eva, āvuso, Tathāgatā acchariyadhammasamannāgatā ca; abbhuta c’eva, āvuso, Tathāgatā abbhutaḍḍhammasamannāgatā cāti. Ayañ ca h’ idan tesu bhikkhūnaṃ antarākathā vippakatā hoti. (MN.III pp.118-119)

〈訳〉 さて、多くの比丘たちが、食後に托鉢よりもどり、講堂に集まって、坐っていたとき、つぎの談話が起った。「友らよ、希有である。友らよ、未曾有である。如来に大神力があり、大威力があることは。実に如来は、般涅槃し、戲論を断ち、道を断ち、輪廻を終息させ、一切の苦を超越した過去の諸仏について知っていたからである。『かの世尊方はこのような生まれであった』とか『かの世尊方はこのような名であった』とか『かの世尊方はこのような姓であった』とか『かの世尊方はこのような戒を持っていた』とか『かの世尊方はこのような法を持っていた』とか『かの世尊方はこのような慧を具えていた』とか『かの世尊方はこのように住していた』とか『かの世尊方はこのような解脱をした』というように」と。このように言われたとき、尊者アーナンダは、比丘たちに次のように言った。「友らよ、希有である。如来方が希有の法をそなえていることは。友らよ、また未曾有である。如来方が未曾有の法をそなえていることは」と。比丘たちのこの談話は中断された。

この後、ブッダが講堂に来て、比丘たちから中断した談話の内容を聞き、次のように述べる。

## 【資料 2】

Atha kho Bhagavā āyasmantaṃ Ānandaṃ āmantesi:—Tasmātiha taṃ Ānanda, bhiyyosomattāya paṭibhantu Tathāgatassa acchariyā abbhutaḍḍhammā ti. (MN.III p. 119)

〈訳〉 さて世尊は、尊者アーナンダに言った。「それではアーナンダよ、[あなたは]如来の希有にして未曾有である諸々の法がさらに明らかになるようにしなさい」と。

Sammukhā me taṃ, bhante, Bhagavato sutuṃ, sammukhā paṭiggahītuṃ: Sato sampajāno uppijāmaṇo, Ānanda, Bodhisatto Tusitaṃ kāyaṃ uppijīti; yam pi, bhante, sato sampajāno Bodhisatto Tusitaṃ kāyaṃ uppijīti, idam ahaṃ bhante, Bhagavato acchar-

iyam abbhutadhammam dhāremi. (MN.III p.119)

〈訳〉「尊師よ、私はつぎのように世尊のご面前でお聞きし、ご面前でお受けしています。  
『アーナンダよ、菩薩は念をそなえ、正知をそなえ、トゥシタ天の身に生まれたのである』  
と。尊師よ、菩薩は念をそなえ、正知をそなえ、トゥシタ天の身に生まれたということ、  
これを私は世尊の希有であり未曾有である法と憶持いたします。」

【資料2】が記すように、『希有未曾有法経』での菩薩誕生記事は、アーナンダが、以前にブッダから聞いた話として語りをはじめの設定となっている。

『希有未曾有法経』の菩薩誕生記事をまとめると以下のようになる。<sup>⑧</sup>

(1) 菩薩は念をそなえ、正知をそなえ、トゥシタ天の身に生まれかわる。(2) トゥシタ天にとどまる。(3) 寿命の限りにとどまる。(4) そこから没して母胎に入る。(5) 母胎に入ると、無量の広大な光が神々の威神力を圧倒して現れる。(6) 菩薩と母とを守護するために四天子が接近する。(7) 菩薩の母は自然に戒をそなえる。(8) 菩薩の母には他の男性に対して愛欲を伴った思いが起こらない。(9) 菩薩の母は五種の欲を与えられ楽しむ。(10) 菩薩の母は安らかで身体に疲労がない。(11) 菩薩の母は、菩薩が生まれて七日のうちに亡くなり、トゥシタ天に生まれかわる。(12) 菩薩の母は十ヵ月で菩薩を出産する。(13) 菩薩の母は立ったまま出産する。(14) 菩薩が母胎から出るとき、初めに神々が、後に人々が受けとめる。(15) 菩薩が母胎から出るとき、菩薩は大地に到達することがなく、四天子が受けとめる。(16) 菩薩が母胎から出るとき、いかなる不浄物にも汚されない。(17) 菩薩が母胎から出るとき、冷熱二つの噴水が現れ、菩薩と母を水洗いする。(18) 菩薩は生まれると、静かに両足で大地に立ち、北に向かって七歩進み、あらゆる方向を眺め、「私は世界の第一人者である」との言葉を語る。<sup>⑨</sup>  
(19) 菩薩が母胎から出るとき、無量の広大な光が神々の威神力を圧倒して現れ、また一万世界が震動する。

以上が『希有未曾有法経』における菩薩誕生記事の内容である。上記の項目それぞれの末尾に「世尊の希有であり未曾有である法と憶持いたします (Bhagavato acchariyam abbhutadhammam dhāremi.)」という定型句が添えられる。そして本経の末尾に、如来にはもろもろの受・想・尋が、生じるとおり、現前するとおり、滅没するとおりに知られ、これも希有であり未曾有な法であるということがブッダによって説示される。

本経はその内容から（特に誕生偈を含むことから）、後代の仏伝文献におけるブッダ誕生場面の源泉になる要素を含むものとして重視されてきた。<sup>⑩</sup>

さて本経で注意すべき記述は、導入部分の【資料1】である。この記述は、漢訳『未曾有法経』には存在しない。漢訳『未曾有法経』は以下のように記す。

## 【資料 3】

爾時尊者阿難。則於晡時從燕坐起。往詣佛所稽首禮足。却住一面白曰。世尊。我聞世尊迦葉佛時始願佛道行梵行。若世尊迦葉佛時始願佛道行梵行者。我受持是世尊未曾有法。我聞世尊迦葉佛時始願佛道行梵行生兜瑟哆天。若世尊迦葉佛時始願佛道行梵行生兜瑟哆天者。我受持是世尊未曾有法。(大正 1、p.469c)

〈訳〉ある時、尊者阿難は、夕刻に、燕坐から立ち上がり、仏のところに参って、礼拝し、退いて面前に坐って申し上げた。「世尊、私は世尊が迦葉仏の時代に始めて仏道を願い、梵行を行ったと聞きました。もし世尊が迦葉仏の時代に始めて仏道を願い、梵行を行ったとすれば、私はこれを世尊の未曾有である法と受持いたしましょう。私は世尊が迦葉仏の時代に始めて仏道を願い、梵行を行い、兜瑟哆天にお生まれになったと聞きました。もし世尊が迦葉仏の時代に仏道を願い始め、梵行を行い、兜瑟哆天にお生まれになったのであれば、私はこれを世尊の未曾有である法と受持いたしましょう。」

このように、漢訳『未曾有法経』の誕生記事は、迦葉仏の時代のブツダの事蹟として述べられる(ここでは「菩薩」の語は用いられない)。阿難が語るという形態は、『希有未曾有法経』と同じである。しかしこの後、漢訳『未曾有法経』では、ブツダの誕生から成道までを描いている(『希有未曾有法経』は菩薩誕生の場面のみ記す<sup>⑪</sup>)。また誕生偈は存在しない<sup>⑫</sup>。『希有未曾有法経』とはかなりの差異がある。

さて、【資料 1】に関して、注釈書に以下の説明がある。

## 【資料 4】

Evam-jaccā ti Vipassi-ādayo khattiyajaccā, Kakusandhādayo brāhmaṇajaccā ti.  
(*Papañcasūdanī* IV p.167)

〈訳〉「このような生まれであった」とは、ヴィパッシンなどは王族の生まれであり、カクサンダなどは、バラモンの生まれであったと [いうことである]。

Evam-gottā ti Vipassi-ādayo Koṇḍañṇagottā, Kakusandhādayo Kassapagottā ti.  
(*Papañcasūdanī* IV p.167)

〈訳〉「このような姓であった」とは、ヴィパッシンなどは、コンダンニャ姓であり、カクサンダなどは、カッサパ姓であったと [いうことである]。

このように、注釈書では過去仏の名前を記す。そしてこの内容は、『希有未曾有法経』と同様、パーリ上座部に帰属し、過去七仏が登場する *Mahāpadānasuttanta* (以下 MAP と表記) と関連する。MAP は冒頭で過去七仏の生まれた時期、寿命などについて説明する。その中に次

の記述が存在する。

【資料 5 -a】

Vipassī bhikkhave bhagavā araham sammā-sambuddho khattiyo jātiyā ahoṣi, khattiya-kule udapādi. Sikhī bhikkhave bhagavā araham sammā-sambuddho khattiyo jātiyā ahoṣi, khattiya-kule udapādi. Vessabhū bhikkhave bhagavā araham sammā-sambuddho khattiyo jātiyā ahoṣi, khattiya-kule udapādi. Kakusandho bhikkhave bhagavā araham sammā-sambuddho brāhmaṇo jātiyā ahoṣi, brāhmaṇa-kule udapādi. Konāgamano bhikkhave bhagavā araham sammā-sambuddho brāhmaṇo jātiyā ahoṣi, brāhmaṇa-kule udapādi. Kassapo bhikkhave bhagavā araham sammā-sambuddho brāhmaṇo jātiyā ahoṣi, brāhmaṇa-kule udapādi. Aham bhikkhave etarahi araham sammā-sambuddho khattiyo jātiyā ahoṣim, khattiya-kule uppanno. (DN.II pp.2-3)

〈訳〉 比丘たちよ、阿羅漢であり正等覚者であるヴィパッシン世尊は、生まれが王族であり、王族家に生まれたのである。比丘たちよ、阿羅漢であり正等覚者であるシキン世尊は、生まれが王族であり、王族家に生まれたのである。比丘たちよ、阿羅漢であり正等覚者であるヴェッサブー世尊は、生まれが王族であり、王族家に生まれたのである。比丘たちよ、阿羅漢であり正等覚者であるカクサング世尊は、生まれがバラモンであり、バラモン家に生まれたのである。比丘たちよ、阿羅漢であり正等覚者であるコーナーガマナ世尊は、生まれがバラモンであり、バラモン家に生まれたのである。比丘たちよ、阿羅漢であり正等覚者であるカッサパ世尊は、生まれがバラモンであり、バラモン家に生まれたのである。比丘たちよ、現在、阿羅漢であり正等覚者である私は、生まれが王族であり、王族家に生まれたのである。

【資料 5 -b】

Vipassī bhikkhave bhagavā araham sammā-sambuddho Koṇḍañño gottena ahoṣi. Sikhī bhikkhave bhagavā araham sammā-sambuddho Koṇḍañño gottena ahoṣi. Vessabhū bhikkhave bhagavā araham sammā-sambuddho Koṇḍañño gottena ahoṣi. Kakusandho bhikkhave bhagavā araham sammā-sambuddho Kassapo gottena ahoṣi. Konāgamano bhikkhave bhagavā araham sammā-sambuddho Kassapo gottena ahoṣi. Kassapo bhikkhave bhagavā araham sammā-sambuddho Kassapo gottena ahoṣi. Aham bhikkhave etarahi araham sammāsambuddho Gotamo gottena. (DN.II p.3)

〈訳〉 比丘たちよ、阿羅漢であり正等覚者であるヴィパッシン世尊は、姓がコンダンニャであった。比丘たちよ、阿羅漢であり正等覚者であるシキン世尊は、姓がコンダンニャであった。比丘たちよ、阿羅漢であり正等覚者であるヴェッサブー世尊は、姓がコンダンニ

であった。比丘たちよ、阿羅漢であり正等覚者であるカクサンダ世尊は、姓がカッサパであった。比丘たちよ、阿羅漢であり正等覚者であるコーナーガマナ世尊は、姓がカッサパであった。比丘たちよ、阿羅漢であり正等覚者であるカッサパ世尊は、姓がカッサパであった。比丘たちよ、現在、阿羅漢であり正等覚者である私は、姓がゴータマである。

注釈書【資料4】の説明から、『希有未曾有法経』における【資料1】の記述は、MAPの過去七仏について説明する【資料5】と同内容の記述を継承していると考えられる。そしてこの後、ブッダは、過去仏であるヴィパッシン仏の伝記を述べる。その中にヴィパッシン菩薩（成道以前であるため、菩薩の呼称を用いている）の誕生記事が存在する。この箇所は、『希有未曾有法経』の菩薩誕生記事と同じ形態である<sup>⑬</sup>。『希有未曾有法経』における菩薩誕生記事の成立を考察するうえで、MAPに保存されるヴィパッシン菩薩誕生記事は重要になってくる。そのことについて、以下検討していく。

## 2. *Mahāpadānasuttanta* におけるヴィパッシン菩薩誕生記事

MAPの内容を概略すると以下の通りである。

〈1〉比丘たちの間で前生に関する談話が起る。〈2〉それに答える形で、ブッダが比丘たちに過去七仏それぞれの生まれた時代、生まれ（【資料5-a】）、姓（【資料5-b】）、寿命、菩提樹、二大弟子、サンガの構成、侍者、父母、王都の名称を述べる（以下この箇所を「七仏の事蹟」と呼ぶ）。ここで一度、ブッダは比丘たちの前から去る。〈3〉再び現れたブッダは、第一仏であるヴィパッシン仏の伝記を比丘たちに語り始める（以下この箇所を「ヴィパッシン仏伝」と呼ぶ）。〈4〉最後に、浄居天の神々が、ヴィパッシン仏の事蹟をブッダに語る。

さて、上記〈2〉「七仏の事蹟」の直後、〈3〉「ヴィパッシン仏伝」が説示される直前に、以下の記述がある。

### 【資料6】

Atha kho tesam bhikkhūnaṃ acira-pakkantassa Bhagavato ayam antarā kathā udapādi: ‘Acchariyaṃ āvuso abbhutaṃ āvuso Tathāgatassa mahiddhikatā mahānubhāvatā, yatra hi nāma Tathāgato atite Buddhe parinibbute chinna-papañce chinna-vaṭume pariyādinna-vaṭte sabba-dukkha-vītivatte jātito pi anussarissati, nāmato pi anussarissati, gottato pi anussarissati, āyuppamāṇato pi anussarissati, sāvaka-yugato pi anussarissati, sāvaka-sannipātato pi anussarissati—“Evam-jaccā te bhagavanto ahesum iti pi, evam-nāmā evam-gottā evam-silā evam-dhammā evam-paññā evam-vihārī evam-vimuttā te Bhagavanto ahesum iti pīti.” (DN.II p.8)

〈訳〉さて、世尊が立ち去られてすぐに、比丘たちの間で次の談話が起った。「友らよ、希有である。友らよ、未曾有である。如来に大神力があり、大威力があることは。実に如来は、般涅槃し、戯論を断ち、道を断たれ、輪廻を終息させ、一切の苦を超越した過去の諸仏について、生まれを記憶し、名を記憶し、姓を記憶し、寿命を記憶し、両弟子を記憶し、弟子集会を記憶するということは。『かの世尊方はこのような生まれであった』とか『かの世尊方はこのような名であった、このような姓であった、このような戒を持っていた、このような法を持っていた、このような慧を具えていた、このように住していた、このような解脱をした』と。」

Kin nu kho āvuso? Tathāgatass’ eva nu kho esā dhamma-dhātu suppaṭividdhā yassā dhamma-dhātuyā suppaṭividdhattā Tathāgato atīte Buddhhe parinibbute chinna-papañce chinna-vaṭume pariyādinna-vaṭte sabba-dukkha-vītivatte jātito pi anussarati, nāmato pi anussarati, gottato pi anussarati, āyuppamāṇato pi anussarati, sāvaka-yugato pi anussarati, sāvaka-sannipātato pi anussarati: “Evaṃ-jaccā te bhagavanto ahesum iti pi, evaṃ-nāmā evaṃ-gottā evaṃ-silā evaṃ-dhammā evaṃ-paññā evaṃ-vihārī evaṃ-vimuttā te Bhagavanto ahesum iti pīti.”? Udāhu devatā Tathāgatassa etam atthaṃ ārocesum yena Tathāgato atīte Buddhhe parinibbute chinna-papañce chinna-vaṭume pariyādinna-vaṭte sabba-dukkha-vītivatte jātito pi anussarati, nāmato pi anussarati, gottato pi anussarati, āyuppamāṇato pi anussarati, sāvaka-yugato pi anussarati, sāvaka-sannipātato pi anussarati: “Evaṃ-jaccā te Bhagavanto ahesum iti pi, evaṃ-nāmā evaṃ-gottā evaṃ-silā evaṃ-dhammā evaṃ-paññā evaṃ-vihārī evaṃ-vimuttā te Bhagavanto ahesum iti pīti”? Ayañ ca h’ idaṃ tesam bhikkhūnaṃ antarā kathā vippakatā hoti. (DN.II pp.8-9)

〈訳〉「友らよ、一体どうしてなのであろうか。如来にだけこの法の本質がよく洞察されており、その法の本質がよく洞察されているために、如来は、般涅槃し、戯論を断ち、道を断ち、輪廻を終息させ、一切の苦を超越した過去の諸仏について、生まれを記憶し、名を記憶し、姓を記憶し、寿命を記憶し、両弟子を記憶し、弟子集会を記憶するのであろうか。『かの世尊方はこのような生まれであった』とか『かの世尊方はこのような名であった、このような姓であった、このような戒を持っていた、このような法を持っていた、このような慧を具えていた、このように住していた、このような解脱をした』というように。それとも神々が如来にこのことを告げ、そのため如来は、般涅槃し、戯論を断ち、道を断ち、輪廻を終息させ、一切の苦を超越した過去の諸仏について、生まれを記憶し、名を記憶し、姓を記憶し、寿命を記憶し、両弟子を記憶し、弟子集会を記憶するのであろうか。『かの

世尊方はこのような生まれであった』とか『かの世尊方はこのような名であった、このよう  
な姓であった、このような戒を持っていた、このような法を持っていた、このような慧  
を具えていた、このように住していた、このような解脱をした』というように。」しかし  
比丘たちのこの談話は中断された。

この【資料6】は、『希有未曾有法経』で記される【資料1】と重複する内容を持つ。この後、  
ブッダが再び現れ、「法の本質をよく洞察している」ことと、「神々が告げた」ために、過去仏  
の様々な事蹟について記憶していると比丘たちに説明する (DN.II p.10)。そしてブッダは次  
のように述べる。

【資料7】

‘Iccheyyātha no tumhe bhikkhave bhiyyoso mattāya pubbe-nivāsa-paṭisaṃyuttaṃ  
dhammiṃ katham sotun ti?’ ‘Etassa Bhagavā kālo, etassa Sugata kālo. Yaṃ Bhagavā  
bhiyyoso mattāya pubbe-nivāsa-paṭisaṃyuttaṃ dhammiṃ katham kareyya,  
Bhagavato sutvā bhikkhū dhāressantiti.’ ‘Tena hi bhikkhave suṇātha, sādhukaṃ  
manasikarotha, bhāssissāmīti.’ ‘Evaṃ bhante’ ti kho te bhikkhū Bhagavato paccas-  
sosuṃ (DN.II pp.10-11)

〈訳〉「比丘たちよ、あなたがたは、前生に関する法話をさらに聞きたいか」

「世尊、まさにその時です。善逝よ、まさにその時です。世尊がさらに前生に関する法話  
をすれば、比丘たちは世尊の〔話を〕憶持するでしょう。」

「それでは比丘たちよ、聞きなさい。そして十分に注意しなさい。〔では〕話そう」「わか  
りました、世尊」と比丘たちは世尊に答えた。

この後、「ヴィパッシン仏伝」がブッダによって説示される。その中にヴィパッシン菩薩の  
誕生記事がある。

【資料8】

‘Atha kho bhikkhave Vipassī Bodhisatto Tusitā kāyā cavitvā sato sampajāno mātu-  
kucchiṃ okkami. Ayam ettha dhammatā. (DN.II p.12)

〈訳〉さて比丘たちよ、トゥシタ天より没したヴィパッシン菩薩は、念をそなえ、正知を  
そなえ母胎に入ったのである。これがこの場合における常法である。

この後の内容は、先述した『希有未曾有法経』の菩薩誕生記事(5)～(19)とほぼ一致す  
る (DN.II pp.12-15)。ただし MAP では、それぞれの項目の末尾に、「これがこの場合におけ

る常法である (Ayan ettha dhammatā)」という定型句が添えられる。

さて【資料6】は『大本經』では以下のように記される。

【資料9】

時諸比丘於乞食後集花林堂。各共議言。諸賢比丘。唯無上尊為最奇特。神通遠達。威力弘大。乃知過去無數諸佛。入於涅槃。斷諸結使。消滅戲論。又知彼佛劫數多少。名號姓字。所生種族。其所飲食。壽命脩短。所更苦樂。又知彼佛有如是戒。有如是法。有如是慧。有如是解。有如是住。云何諸賢。如來為善別法性知如是事。為諸天來語。乃知此事。(大正1, p.1b)

〈訳〉さて、比丘たちは乞食の後、花林堂に集まり互いに議論していた。「比丘たちよ、ただ無上である尊者だけが特別に優れており、神通が広くゆきわたり、威力が大きいために、過去の無数の諸仏が涅槃に入り、多くの結使を断ち、戲論を滅ぼしたことを知っており、またかの仏たちが、どの時代に出現したのか、名号と姓字、どのような生まれか、飲食したもの、寿命の長短、どのような苦樂を経験したかを知っていて、またかの仏たちがどのような戒を持ち、どのような法を持ち、どのような慧を具え、どのような解脱をし、どう住していたかを知っているのだ。賢者たちよ、どうであろうか。如来は法性をよく理解しているからこの事をしているのであろうか。[あるいは] 神々が語ったからこの事をしているのか。」

ここで注意すべき点は、【資料9】が設置されている箇所である。『大本經』での【資料9】は、MAPの【資料6】と異なり、經典の冒頭、つまり「七仏の事蹟」の前に設置される。また、梵本 *Mahāvadānasūtra* も『大本經』と同じ構成を保つ (ed. Waldschmidt, teil2 p.64)。「七仏の事蹟」のみを伝承する『七仏父母姓字經』<sup>⑭</sup>『増一阿含經』<sup>⑮</sup>も【資料6】<sup>⑮</sup>【資料9】に相当する記述を保持するが (大正1、pp.159a-b、大正2、p.790a)、ここでも『大本經』や梵本と同様、經典の冒頭に設置される<sup>⑯</sup>。『希有未曾有法經』の記す【資料1】は、「大本經」類と併せて考察すると、過去仏思想の展開のうえでも重要な記述となってくる。

以上、MAPが保存するヴィパッシン菩薩誕生記事を確認した。そして『希有未曾有法經』の【資料1】<sup>⑮</sup>【資料2】の内容から、アーナンダは、以前にブッダからMAPのヴィパッシン菩薩誕生記事、もしくはそれと同内容の話を聞いて『希有未曾有法經』での菩薩誕生を語った可能性が考えられる。そこで問題となるのが、『希有未曾有法經』における「菩薩」が、ブッダの修行時代としての菩薩として語られたのか、過去仏であるヴィパッシン仏の修行時代としての菩薩として語られたのかということである。この問題について、次章で検討する。

### 3. ニカーヤにおける菩薩誕生記事の成立

ここまで、『希有未曾有法経』と、MAPの菩薩誕生記事が深く関係することを確認した。さて、この二経の最大の違いは、『希有未曾有法経』が菩薩誕生のみを記す経典であるのに対し、MAPの「ヴィパッシン仏伝」は、菩薩誕生記事の後、ヴィパッシン王子が具える三十二相についての説明、四門出遊、出家、成道、梵天勧請、転法輪、サンガの成立、そして最後に波羅提木叉の誦出・制定を記すことである<sup>⑭</sup>。MAPの「ヴィパッシン仏伝」が、釈尊の伝記を模倣して作成されたのか、そうではないのかという問題に関しては諸説あるが、このことは、ヴィパッシン仏に関する記事ごとで、事情は変わってくると考えるべきであろう。つまり、釈尊伝の模倣と考えられる箇所もあれば、そうではない可能性を有する箇所もあるということである。では、今回検討している菩薩誕生記事に関してはどうかであろうか。この問題は、『希有未曾有法経』における「菩薩」の意味が重要となる。吹田隆道氏は、『希有未曾有法経』の【資料1】と、MAPの関係を考慮したうえで、「『希有未曾有法経』は『大本経』が伝承した仏陀のあるべき姿としての共通性を釈尊に集約して伝承したものといえる」と指摘される<sup>⑮</sup>。ニカーヤにおける菩薩誕生記事は、*Anguttaranikāya*にも保存されている。

#### 【資料10】

Tathāgatassa bhikkhave arahato sammāsambuddhassa pātubhāvā cattāro acchariyā abbhutā dhammā pātubhavanti. Katame cattāro?

Yadā bhikkhave bodhisatto Tusitā kāyā cavitvā sato sampajāno mātukucchiyaṃ okkamati atha sadevake loke samārake sabrahmake sassamaṇabrāhmaṇiyā pajāya sadevamanussāya appamāṇo ulāro obhāso pātubhavati atikkamm' eva devānaṃ devānubhāvanaṃ. Yā pi tā lokantarikā aghā asaṃvutā andhakārā andhakāratimissā yattha p'imesaṃ candimasuriyānaṃ evaṃ mahiddhikānaṃ evaṃ mahānubhāvanaṃ ābhā nānubhonti, tattha pi appamāṇo ulāro obhāso pātubhavati atikkamm' eva devānaṃ devānubhāvanaṃ. Ye pi tattha sattā uppannā te pi ten' obhāsenā aññaṃaññaṃ sañjānanti -aññe pi kira bho santi sattā idh' uppannā ti Tathāgatassa bhikkhave arahato sammāsambuddhassa pātubhāvā ayaṃ paṭhamo acchariyo abbhuto dhammo pātubhavati. (AN.II pp.130-131.)

〈訳〉 比丘たちよ、如来であり阿羅漢であり正等覚者である [方] の出現により、四の希有未曾有法が出現する。四とは何か。

比丘たちよ、菩薩がトゥシタ天より離れて、正念、正知した [彼が] 母胎に入る時、天を含む世界において、魔を含む [世界] において、梵天を含む [世界] において、沙門・バ

ラモンの人々 [の内] において、天と人間 [の内] において、無量の偉大なる光明が、神々の威力に打ち勝って現れるのである。また世界の間で、障りがなく、抑制のない暗闇・暗黒や、[また] このように大神変があり、大威力がある月や太陽が、光と共でない所、そのような所にも、無量の偉大なる光明が、神々の威力に打ち勝って現れるのである。また、そこに再生せる衆生たちも、光によって互いに知覚するのである。「友よ、他に再生した衆生たちもここにいらしい」と。比丘たちよ、如来であり阿羅漢であり正等覚者である [方] の出現により、この第一の希有未曾有法が出現するのである。

この後、菩薩が母胎から出る時、如来が最上の正等覚を得る時、如来が最上の法輪を転じる時、と設定を変えて、上記の記述を繰り返し述べる (AN.II p.131.<sup>21</sup>)。この記述は、『希有未曾有法經』および MAP の菩薩誕生記事と重複する内容を持つ。また、ブッダがトゥシタ天から来たという記述は、*Suttanipāta* にも存在する (Sn.955. ここでは「菩薩」の語は用いられていない<sup>22</sup>)。これらの資料は、『希有未曾有法經』と MAP における菩薩誕生記事の源泉となる要素を含んでいる可能性がある。そして誕生偈などを含む、より装飾的な菩薩誕生記事が『希有未曾有法經』や MAP に挿入されたと考えられる。この二經の成立の前後は、即座には決定出来ないが、【資料1】【資料2】の内容からすれば、MAP と同内容の文献が、現存の『希有未曾有法經』よりも先に存在したこととなる。そこで『大本經』の異訳の一つである『七仏經』に注目したい。この經典は、『毘婆尸仏經』と合わせると、「大本經」類に相当する内容となる<sup>23</sup>。問題の毘婆尸菩薩誕生記事であるが、これは「七仏の事蹟」と共に『七仏經』に保存されている (大正1, pp.152b-154a, ここでは三十二相についても記す)。この構成は、『毘婆尸仏經』や「大本經」類の内容を併せて考えると、違和感を覚える。つまり「ヴィパッシン仏伝」が、菩薩誕生記事とそれ以降とで分断されることになるからである (『毘婆尸仏經』は毘婆尸太子の四門出遊記事から始まる)。この問題に関して、岡野潔氏は、「『七仏經』に保存されている「七仏の事蹟」と、菩薩誕生記事は初めは独立した經典であり、それが合体して『七仏經』の原型となり、仏伝として完成させるために『毘婆尸仏經』の部分が成立した」と指摘される<sup>24</sup>。「七仏の事蹟」のみを伝承する『七仏父母姓字經』『増一阿含經』の存在を考えると、「七仏の事蹟」部分は最も早い成立であろうと思われる。そして、成立の前後は決定できないが、ヴィパッシン菩薩誕生記事と、それ以降の記事は、一度に出来上がったものではないと考えるのが妥当であろう。さて、『七仏經』にも【資料1】【資料6】【資料9】に相当する記述が存在するが、着目すべきことは、それが設置される箇所である。ここでは、MAP 同様、「七仏の事蹟」の直後、菩薩誕生記事の直前に置かれる (大正1, pp.152a-b)<sup>25</sup>。先述したように、『大本經』、梵本、そして「七仏の事蹟」のみを伝承する『七仏父母姓字經』『増一阿含經』では、經典の

冒頭に設置されている。本来、この導入部分は、吹田隆道氏が指摘するように、「七仏の事蹟」<sup>26</sup>を始めるためのものであったと考えられる。しかし後に、菩薩誕生記事が成立すると、「七仏の事蹟」と菩薩誕生記事の間に置かれる傾向が生じた可能性が高い。そのため、『希有未曾有法経』のように、菩薩誕生記事のみを保存する文献では、冒頭に設置されることになるのである。このことから、【資料1】を導入として用いる『希有未曾有法経』における菩薩誕生記事は、MAPが保存する「七仏の事蹟」もしくは、それと同内容の記述を前提として伝承されたと考えられる。そうであれば、『希有未曾有法経』における菩薩誕生記事の「菩薩」を、無批判にブッダ・釈尊の修行時代とすることには問題がある。ヴィパッシン菩薩などの、過去仏の修行時代としての菩薩と考えることが出来るのではなかろうか。これらのことから、ニカーヤにおいて、誕生偈を含む形態の菩薩誕生記事は、過去仏の誕生記事として伝承されたと考えられる。同時にMAPの菩薩誕生記事は、釈尊伝の模倣ではなく、元々、過去仏の誕生記事として編纂・伝承された形態であった可能性が指摘出来る。

## 結 語

本稿の内容をまとめる。第1章で『希有未曾有法経』の菩薩誕生記事の内容を確認し、その導入部分である【資料1】に着目した。その内容および注釈書の説明から、本経が、同じパーリ上座部所伝のMAPに保存される「七仏の事蹟」と密接に関係していることを指摘した。そしてMAPにおけるヴィパッシン菩薩誕生記事の内容を確認し、『希有未曾有法経』の【資料1】と重複する内容を持つ【資料6】について分析したのが第2章である。第3章では、MAPの異訳である漢訳文献に着目し、それらの構成から、『希有未曾有法経』の菩薩誕生記事は、MAPの「七仏の事蹟」と同内容の記述を前提として成立したことを論じた。この点から、『希有未曾有法経』の菩薩誕生記事は、過去仏の誕生記事である可能性を指摘した。このことは、漢訳「未曾有法経」の誕生記事（【資料3】）では、『希有未曾有法経』と異なる内容が伝承されているため、パーリ上座部独自の菩薩誕生記事の形態であるのか、なお検討を要する問題である。

阿含・ニカーヤにおける菩薩思想の一形態として、「過去仏の修行時代としての菩薩」が存在したことは、「大本経」類における「ヴィパッシン菩薩」<sup>27</sup>の記述からも明白である。この形態の「菩薩」は、成道以前の場面を描く仏伝の成立とも無関係ではないと考える。このことは、今回検討した内容に関して言えば、九分教に含まれる「未曾有法」とも併せて考察する必要がある。<sup>28</sup>そして『希有未曾有法経』に保存されるような菩薩誕生記事が、過去仏の伝記とはいえ、極めて纏まった仏伝の体裁を保つ「大本経」類の「ヴィパッシン仏伝」として集約されていく過程は、阿含・ニカーヤにおける仏伝形式の一形態を定義するためにも重要である。<sup>29</sup>この問題

は、「ヴィパッシン仏伝」に含まれる他の記事と関連させて検討しなければならない。今後の課題としたい。

〈略号〉

AN. = *Āṅguttaranikāya* (PTS)

DN. = *Dīghanikāya* (PTS)

MN. = *Majjhimanikāya* (PTS)

大正 = 『大正新修大蔵経』

#### 註

- ① 『望月仏教大辞典』5 (世界聖典刊行協会、1933) pp.4215c-4216b 参照。
- ② 阿含・ニカーヤ、律蔵に含まれる仏伝については、外園幸一『ラリタヴィスタラの研究』上 (大東出版社、1995) pp.43-48に列挙されている。また、増谷文雄氏は、意図的に編纂された最初期の仏伝文献として、パーリ律大品 *Mahākhandaḥaka* に含まれる仏伝、*Ariyapariyesanasutta* (MN.26)、*Mahāparinibbānasuttanta* (DN.16) を詳細に分析された。増谷文雄『仏陀の伝記—資料の研究— (増谷文雄著作集5)』 (角川書店、1981) pp.106-339。
- ③ このことに関して平川彰氏は、「経典作者は仏陀の伝記を作るのが目的で経典を語っているのではなく、別の真理を示さんとしたものが、たまたま仏伝の形をとったにすぎないのである。すなわち仏伝が、何らかの教理的価値をもっており、弟子たちの修行に有意義である場合のみ、聖典として語りつがれる資格を持ったのである」と述べる。平川彰『律蔵の研究II <著作集10>』 (春秋社、2000) p.101。この視点を持てば、ブッダの生涯を断片的に記す文献の存在はなんら不思議ではない。一方、ブッダの全生涯を語る文献に関して外園幸一氏は、「『仏所行讃』がそうであるように、仏陀の生涯の讃美が目的であれば、その内容が誕生から入滅に至る「生涯の全伝」となるべきは勿論である」と述べる。外園幸一 [1995] p.53 参照。
- ④ 森章司氏は、仏伝における成道以前の記事に関して「神話・伝説というべきであって、おそらく後世になって作られたものである」と述べる。森章司『『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究』の目的と方法論』『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究』1 (中央学術研究所、1999) p.3参照。
- ⑤ 本経に相当する漢訳も存在する。『中阿含経』巻第八 (32) 「未曾有法経」、東晋罽賓三蔵瞿曇僧伽提婆訳 (大正1, No.26, pp.469c-471c)。本橋では漢訳『未曾有法経』と表記する。
- ⑥ 水野弘元『釈尊の生涯 <増補版>』 (春秋社、1960) p.302参照。Robert Chalmers “The Nativity of the Buddha”, *Journal of the Royal Asiatic Society*, October (1895) pp.751-771.
- ⑦ 対応する漢訳は『長阿含経』巻第1「大本経」後秦・仏陀耶舎・竺仏念訳 (大正1, No.1 pp.1b-10c) 本稿では『大本経』と表記する。他に以下の異訳がある。
  - ・『仏説七仏経』1巻、宋・法天訳 (大正1, No.2, pp.150a-154a)
  - ・『毘婆尸仏経』2巻、宋・法天訳 (大正1, No.3, pp.154b-159a)
  - ・『七仏父母姓字経』1巻、失訳 (大正1, No.4, pp.159a-160a)
  - ・『増一阿含経』不善品第4経、東晋僧伽提婆訳 (大正2, No.125, pp.790a-791b)
 中央アジアで発見された本経に対応する梵本の断簡も存在し、Waldschmidtにより校訂出版された。E.Waldschmidt, *Das Mahāvadānasūtra* Teil.1,2. (AKADEMIE-VERLAG Berlin, 1953,

- 1956). また近年、吹田隆道氏の校訂により以下のテキストが出版された。Takamichi Fukita, *The Mahāvadānasūtra A new edition based on manuscripts discovered in northern turkestan* (Vandenhoeck&Ruprecht, 2003) 本稿では、パーリ本・梵本・『大本経』を総称する際、「大本経」類と表記する。また、*Mahāvadānasūtra* と *Sanḥabhedavastu* の保存する菩薩誕生記事の構成組織と異同については、吹田隆道「『大本経』と『破僧事』に見る共通の伝統と地方的変遷—特に菩薩誕生伝説を中心として—」『法然学会論叢』6 (1988) pp.5-22参照。
- ⑧ ここでの『希有未曾有法経』の内容説明は、片山一良『【パーリ仏典】第一期5中部(マッジマニカーヤ)後分五十経篇I』(大蔵出版、2001)pp.30-31に従った。
- ⑨ Aggo 'ham asami lokassa, setṭho 'ham asami lokassa, jettṭho 'ham asami lokassa, ayam antimā jāti, na 'tthi dāni punabbhavo ti. (MN.III p.123)  
 <訳> 私は世界の第一人者である。私は世界の最勝の者である。私は世界の最年長者である。これは最後の生まれである。もはや再生はない。
- ⑩ 水野弘元「釈尊の降誕に関する伝説の謎」『大世界』三月号(1957) pp.28-32参照。
- ⑪ この相違に関して中村元氏は「まとまった仏伝への動きであり、後代のもろもろの仏伝の一つの原型とみなすべきであろう。」と指摘される。中村元「仏伝」『原始仏典』(筑摩書房、1974) p.7参照。『中阿含経』の所属部派は、説一切有部、もしくはそれに極めて近い部派であると考えられている。前田恵学『原始仏教聖典の成立史研究』(山喜房佛書林、1964) pp.638-639, p.646参照。他に榎本文雄「Udānavarga 諸本と雑阿含経、別訳雑阿含経、中阿含経の部派帰属」『印度学仏教学研究』28-2 (1980) pp.933 (55)-931 (57)。
- ⑫ 阿理生「釈尊の誕生伝説—その諸問題の解明—」『戸崎宏正博士古稀記念論文集インドの文化と論理』(九州大学出版会、2000) p.149参照。
- ⑬ Lord Chalmers, *Further Dialogues of the Buddha Translated from The pali of THE MAJJHIMA NIKAYA*, Vol.2 (SRI SATGURU PUBLICATIONS, 1927) p.224.  
 T.W.Rhys Davids, *DIALOGUES OF THE BUDDHA*, Vol.2 (PTS,1910) p.8.
- ⑭ 飯已有數十比丘。於屏處相與共語言。佛是我所尊事神無極。佛自在意變化。何等不作知已去佛及當來佛。年紀壽命父母姓字弟子幾人。所施行志意教令。
- ⑮ 爾時衆多比丘。集普會講堂各生此念。今如來甚奇甚特。過去取般涅槃者。亦復知彼姓名種族持戒翼從。皆悉分明。三昧智慧解脫解脫見慧。身壽有長短。皆悉知之。云何諸賢。為是如來分別法處極為清淨知彼諸佛姓字所出之處乎。為是諸天來至佛所而告此耶。
- ⑯ この問題について、吹田隆道氏は、『ヴィパッシン仏伝』を始めるためのプロローグが本来の経典の冒頭部分として『七仏の事蹟』の前に位置していたことがわかる。(中略) 本来は、MAPのように『なぜ如来が過去仏の存在を知っているのか』という疑問が『七仏の事蹟』を知った後に生まれたものでなく、すでに別の典籍において過去仏の存在が一般化しており、それを受けて『大本経』の初期の部分である『七仏の事蹟』が成立していったと考えるべきである」と指摘される。吹田隆道「『大本経』に見る仏陀の共通化と法レベル化」『渡邊文麿博士追悼記念論集・原始仏教と大乘仏教』上(永田文昌堂、1993) pp.271-273参照。
- ⑰ ヴィパッシン仏による波羅提木叉制定箇所成立に関しては、拙稿「Mahāpadānasuttanta とパーリ律経分別の関係」『パーリ学仏教文化学』18 (2005) pp.77-84参照。
- ⑱ 「大本経」類の「ヴィパッシン仏伝」が、「釈尊の伝記を模倣して作成された」とするものは、平等通照『佛陀の死』(印度学研究所、1961) p.32. 干潟龍祥「インド仏教重要事項年代考」『鈴木学術財団研究年報』12/13 (1976) p.8. また岡野潔氏は「実質的に本経の大きな部分を占めるヴィパッシン仏の仏伝は、編集当時存在したであろう原始的な釈迦牟尼の仏伝の、固有名詞だけを入

れ替えた複製といえるものである」と述べる。岡野潔「偉大な過去世の物語-大本経-」『原始仏典』第2巻（春秋社、2003）p.481 参照。一方、中村元氏は、釈尊の伝記が「ヴィパッシン仏伝」を借用したという可能性を示唆する。中村元『ゴータマ・ブッダ I 〈選集決定版11〉』（春秋社、1992）p.7 参照。また、石上善応氏は、誕生偈と四門出遊の場面は「ヴィパッシン仏伝」がもつとも古形であろうと述べる。石上善応「仏伝と仏伝文学」『大正新修大藏經会員通信』39（1964）p.2 参照。

- ①⑨ この記事に関しては、誕生偈成立の観点で多く研究がなされてきた。石上善応「仏伝に現われた『七歩』の意味」『仏教文化研究』15（1969）pp.21-36 に誕生偈を記す文献が列挙されている。他に門川徹眞「仏伝における誕生偈の形成過程」『印度学仏教学研究』15-2（1967）pp.614-615. 阿理生氏は『希有未曾有法經』と MAP における誕生偈が最古層のものであると述べる。阿理生 [2000] pp.137-172 参照。
- ②⑩ 吹田隆道 [1993] pp.278-281 参照。
- ②⑪ 対応する漢訳も存在する。『増一阿含經』卷十七、四諦品第二十五、東晋僧伽提婆訳（大正2, No.125, p.631b-c）
- ②⑫ ニカーヤ以外でブッダがトゥシタ天にいたことを記す文献については、中村元 [1992] p.82 参照。
- ②⑬ 両経とも法天による翻訳とされる。この二経が本来一つのものであったか否かについては諸説ある。赤沼智善氏は「『七仏経』と『毘婆尸仏経』とは一連の經典であって、伝持の間に二経とせられたものであろう」とされる。『仏書解説大辞典』9（大東出版社、1935）p.145c 参照。岡野潔氏は「『七仏経』に相当する部分が独立した經典として存在し、仏伝として完成させるために『毘婆尸仏経』に相当する部分が成立し加えられた」と述べる。岡野潔 [1984]「七仏経と毘婆尸仏経」『印度学仏教学研究』33-1（1984）pp.128-129 参照。吉元信行氏は「先に『七仏経』の部分が成立し、それを仏伝として完成させるため、『毘婆尸仏経』の部分が加わって『大本経』のような内容が成立したが、毘婆尸仏に関する付加部分のみが独立して『毘婆尸仏経』となったと考えられる」と述べる。『大藏經全解説大事典』（雄山閣出版、1999）p.4 参照。
- ②⑭ 岡野潔 [1984] pp.128-129 参照。
- ②⑮ 諸苾芻衆。從其本舍。往迦里梨道場。互相推問。過去如來入大涅槃。離諸戲論。永斷輪迴。而無過失。如是大丈夫。有如是智慧。如是持戒。如是三摩地。如是解脫。如是威德。如是種族。降世利生。甚為希有不可思議。
- ②⑯ 本稿注⑩ 参照。
- ②⑰ *Samyuttanikāya*「因縁相應」にも「過去仏の修行時代としての菩薩」が登場する（SN.II pp.5-11）。ここでは十二支縁起の逆觀・順觀をなす菩薩として説かれる。杉本卓洲「パーリ仏典に見られる菩薩」『パーリ学仏教文化学』創刊号（1988）pp.99-100 参照。また *Samyuttanikāya* の注釈書 *Sāratthappakāsinī* に「過去世の菩薩 (atita bodhisatta)」の語が見出せる。*Sāratthappakāsinī* II p.22.
- ②⑱ 岩本裕氏は「九分教十二分教の中に仏伝という項目はなくても、その中の一部のものから仏伝文学へ展開する端緒を掴むことができる」と述べ、その一つに「未曾有法」を挙げられる。岩本裕「仏伝文学の成立（二）」『三藏集』第一輯（1975）pp.251-258 参照。
- ②⑲ MAP が保存する「ヴィパッシン仏伝」について、平等通照氏は「断片的な仏伝しかない阿含聖典の中で特異な存在をなしている」と指摘する。平等通照 [1961] p.31 参照。

【付記】本稿は平成16年度龍谷仏教学会学術大会（2005年1月13日）において口頭発表した内容に、加筆修正したものである。